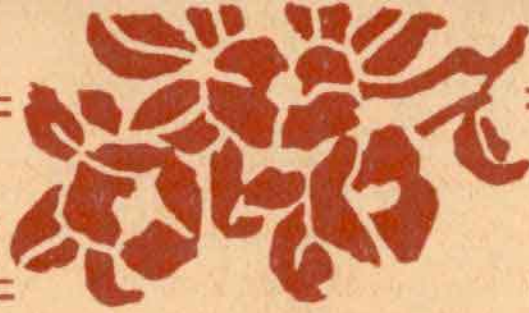




角川文庫

— 3 —

萬葉集

下卷

附 初句索引

武田祐吉校註



角川書店



角川文庫

萬葉集 下巻
全二冊



昭和三十年四月二十日 初版発行
昭和四十八年四月三十日 二十五版発行

定価は、帯・カバー
に明記してあります

校註者 武田祐吉
たけだ ゆうきち

発行者 角川源義
かくがわ げんぎ

印刷者 橋本伝四郎
しらかわ けんしろう
市川市湊新田六十一

発行所

東京都千代田区富士見二ノ十三
株式會社 角川書店
かどがわしよてん
電話東京(265)セニ(大代表)

落丁・乱丁本はお取替えいたします

禹 葉 集

下 卷

附 初句索引

武田祐吉校註



角川文庫

3

凡 例

- 一 本書は萬葉集の全部を書下し文に改め、これに簡単な脚註を附けたものである。
- 一 各卷卷頭の歌に限り、特に原文を載せて参考に資した。
- 一 原典には各卷のはじめに目録があるが、今まとめて各冊のはじめに掲げ、目次に代用するこ
ととした。
- 一 本文および脚註は、卷の十四までは前著「新定萬葉集」(昭和二十三年、有精堂)によるところが多い。
- 一 脚註の中に出てゐる諸傳本、および註釋書は、略稱を使用した。そのおもなものは左の通りである。

諸傳本

桂本、元暦校本、藍紙本、金澤本、天治本、神田本、西本願寺本、仙覺本、寛永版本

註釋書

代匠記 萬葉代匠記 (契沖)

考 萬葉考 (賀茂真淵)

略解 萬葉集略解 (橘千蔭)

攷證 萬葉集攷證 (岸本由豆流)

古義 萬葉集古義 (鹿持雅澄)

新考 萬葉集新考 (井上通泰)

講義 萬葉集講義 (山田孝雄)

一 上卷に作者別索引、下卷に初句索引を附けて、檢索に便にした。これらの索引に出した作品は一首として完備してゐるもののみをあげた。作者別索引は、五十音順とし、現代の發音かなづかひによつた。作品の所在は、卷數と番號とにより、長歌、旋頭歌、佛足跡歌は、番號の下に、それぞれ、長、旋、佛と記した。記事のないものはすべて短歌である。人名は、氏名の傳はるものはこれにより、傳はらないものはこれに代るべきものによつた。諸歌集は、人名ではないが、人名に準じてこれを出した。作者未詳は一括して出したものが多い。人名の次に、作品の數を記したが、十首以下の場合はこの省いた。作者未詳には歌數をあげない。作者別索引の終に、時代順作者人名錄を載せた。初句索引は、歌の番號のみを出した。

目次

卷の第十一

古今の相聞往來の歌の類の上

旋頭歌十七首 (二三五一―六七)	二七
正に心緒を述ぶる歌一百四十九首 (二三六八―二四一四、二五一七―二六二八)	二八、二九
物に寄せて思を陳ぶる歌二百八十二首 (二四一五―二五〇七、二六一九―二八〇七)	三二、三三
問答の歌二十九首 (二五〇八―二六、二八〇八―二七)	三七、三九
譬喩の歌十三首 (二八二八―四〇)	三九

卷の第十二

古今の相聞往來の歌の類の下

卷の第十三

正に心緒を述ぶる歌一百十首 (二八四一―五〇、二八六四―二九六三)	六二、六三
物に寄せて思を陳ぶる歌一百五十首 (二八五一―六三、二九六四―三二〇〇)	六二、六三
問答の歌三十六首 (三二〇一―二六、三二二一―二〇)	六八、六九
羈旅に思を發せる歌五十三首 (三二二七―七九)	八〇
別を悲める歌三十一首 (三一八〇―三二一〇)	八四

卷の第十四

東歌

雜歌二十七首 (三三二一―四七)	八八
相聞の歌五十七首 (三三四八―三三〇四)	九四
問答の歌十八首 (三三〇五―二二)	一〇六
譬喩の歌一首 (三三三三)	一〇九
挽歌二十四首 (三三三四―四七)	一〇九

上總の國の雜歌一首 (三三四〇)	一二七
------------------	-----

下總の國の雜歌一首 (三三四九)	一二七
常陸の國の雜歌二首 (三三五〇—五二)	一二七
信濃の國の雜歌一首 (三三五二)	一二八
遠江の國の相聞往來の歌二首 (三三五三—五四)	一二八
駿河の國の相聞往來の歌五首 (三三五五—五九)	一二八
伊豆の國の相聞往來の歌一首 (三三六〇)	一二九
相摸の國の相聞往來の歌十二首 (三三六一—七二)	一二九
武藏の國の相聞往來の歌九首 (三三七三—三八二)	一三〇
上總の國の相聞往來の歌二首 (三三八二—八三)	一三〇
下總の國の相聞往來の歌四首 (三三八四—八七)	一三一
常陸の國の相聞往來の歌十首 (三三八八—九七)	一三一
信濃の國の相聞往來の歌四首 (三三九八—三四〇)	一三三
上野の國の相聞往來の歌二十二首 (三四〇一—二二)	一三三
下野の國の相聞往來の歌二首 (三四二四—二五)	一三三
陸奥の國の相聞往來の歌三首 (三四二六—二八)	一三四
遠江の國の譬喩の歌一首 (三四二九)	一三四
駿河の國の譬喩の歌一首 (三四三〇)	一三四
相摸の國の譬喩の歌三首 (三四三一—三三)	一三四

上野の國の譬喩の歌三首 (三四三四—三六)	一二五
陸奥の國の譬喩の歌一首 (三四三七)	一二五
いまだ勘へざる國の雜歌十七首 (三四三八—五四)	一二五
いまだ勘へざる國の相聞往來の歌百十二首 (三四五五—三五六六)	一二六
いまだ勘へざる國の防人の歌五首 (三五六七—七二)	一二六
いまだ勘へざる國の譬喩の歌五首 (三五七二—七六)	一二六
いまだ勘へざる國の挽歌一首 (三五七七)	一二六

卷の第十五

天平八年丙子の夏六月、新羅の國に使を遣しし時に、使人等の、各別を悲みて贈答し、また海路の上に旅を勵み思を陳べて作れる歌、并せて所に當りて誦詠せる古歌 一百四十五首	一三五
贈答の歌十一首 (三五七八—八八)	一三五
秦間滿の歌一首 (三五八九)	一三六
暫く私の家に還りて思を陳ぶる歌一首	一三六

(三五九〇) 一三六

發よなだちに臨みし時の歌三首 (三五九一―九三) 一三六

船に乗り海に入りて路上に作れる歌八首

(三五九四―三六〇一) 一三六

所に當りて誦詠せる古歌十首 (三六〇二―一一) 一三七

備後の國水調の郡長井の浦に船泊てし夜

作れる歌三首 (三六二二―二四) 一三八

風速の浦に船泊てし夜作れる歌二首

(三六五一―一六) 一三九

安藝の國長門の島にて舶を磯邊に泊てて

作れる歌五首 (三六二七―三二) 一三九

長門の浦より舶出せし夜、月の光を仰ぎ

觀て作れる歌三首 (三六二二―二四) 一三九

古き挽歌 丹比大夫の亡りし妻を懷み愴

く挽歌一首短歌一首 并せたり (三六二五―二六) 一三九

物に屬きて思を發せる歌一首短歌二首 并せたり

(三六二七―二九) 一四〇

周防の國玖河の郡麻利布の浦を行きし時

作れる歌八首 (三六三〇―三七) 一四二

大島の鳴門を過ぎて再宿を経たる後、追

ひて作れる歌二首 (三六三八―三九) 一四一

熊毛の浦に船泊てし夜作れる歌四首

(三六四〇―四三) 一四二

佐婆の海中に忽に逆風に遭ひ漂流して豐

前の國下毛の郡分間の浦に著き、追ひて

艱難を怛みて作れる歌八首 (三六四四―五一) 一四二

筑紫の館に至り遙に本郷を望み懷み愴き

て作れる歌四首 (三六五二―五五) 一四三

七夕に天漢を仰ぎ觀、各所思を陳べて作

れる歌三首 (三六五六―五八) 一四三

海邊に月を望みて作れる歌九首 (三六五九―六七)

筑前の國志摩の郡の韓亭に到りて作れる

歌六首 (三六六八―七三) 一四四

引津の亭に船泊てて作れる歌七首 (三六七四―

八〇) 一四五

肥前の國松浦の郡泊島の亭に船泊てし夜、

作れる歌七首 (三六八一―八七) 一四五

挽歌 壹岐の島に到りて、雪連宅滿みまの死

去りし時作れる歌一首 短歌二首 并せたり (三六八—八九〇) ……	一四六
葛井連子老の作れる歌一首 短歌二首 并せたり (三六九— 九三) ……	一四七
六鰯の作れる歌一首 短歌二首 并せたり (三六九—四九六) ……	一四七
對馬島の淺茅の浦に到りて舶泊てし時作 れる歌三首 (三六九—七九九) ……	一四八
竹敷の浦に舶泊てし時作れる歌十八首 (三七〇—一七) ……	一四八
筑紫に廻り來て海路より京に入るに、播 磨の國の家島に到りて作れる歌五首 (三七一—八一三) ……	一四九
中臣朝臣宅守の、藏部の女孀狹野弟上の娘 子を娶りし時、勅して流罪に斷りて、越前 の國に配せられき。ここに夫婦別れ易く會 ひ難きを相嘆き、各慟める情を陳ぶる贈答 の歌六十三首	
別に臨み娘子の悲み嘆きて作れる歌四首 (三七三—三二六) ……	一五〇
中臣朝臣宅守の、上道して作れる歌四首	

(三七三—三三〇) ……	一五〇
配所に至りて中臣朝臣宅守の作れる歌十 四首 (三七三—一四四) ……	一五一
娘子の、京に留りて悲み傷みて作れる歌 九首 (三七四—五五三) ……	一五二
中臣朝臣宅守の作れる歌十三首 (三七五—四 六六) ……	一五二
娘子の作れる歌八首 (三七六—七七四) ……	一五三
中臣朝臣宅守の、更に贈れる歌二首 (三七七—五七六) ……	一五三
娘子の和へ贈れる歌二首 (三七七—七七八) ……	一五四
中臣朝臣宅守の、花鳥に寄せ思を陳べて 作れる歌七首 (三七七—九八五) ……	一五四

卷の第十六

由縁ある雜歌

二の壯士の、娘を誂へしに、遂に壯士に
適はむことを嫌ひて、林の中に入りて死

りし時、各心緒を陳べて作れる歌二首

(三七八六―八七)

一五

三の男の、共に一の女を娉ひしに、娘子

嘆息きて水底に沈没みし時、哀傷に勝へ

ず、各心を陳べて作れる歌三首 (三七八八―九〇)

一六

竹取の翁の、たまたま九箇の神女に逢ひ、

近く狎れし罪を贖ひて作れる歌一首 短歌并
せたり

(三七九一―九三)

一七

娘子等の和ふる歌九首 (三七九四―三八〇二)

一八

娘子の、竊に壯士に交はりし時、親に知

らせまく欲りして、その夫に與へたる歌

一首 (三八〇三)

一九

壯士の、もはら使節として遠き境に赴き

しかば、娘子の年を累ねて姿容の疲羸せ

ることを悲歎せしに、壯士の還り來て涙

を流して口號める歌一首 (三八〇四)

二〇

娘子の、夫の君の歌を聞き、聲に應へて

和ふる歌一首 (三八〇五)

二一

女子の竊に壯士に接ひて、その親呵嘖し、

壯士悚惕りし時、娘子の夫に贈り與ふる

歌一首 (三八〇六)

二二

葛城の王の、陸奥に發きし時、祇承の緩

怠なりしかば王の意悦びざりしに、采女

の觴を捧げて詠める歌一首 (三八〇七)

二三

男女の衆集ひて野遊せし時に、鄙人の夫

婦あり、容姿衆諸に秀れたり。よりて美

貌を贊嘆せる歌一首 (三八〇八)

二四

幸せらえし娘子、寵薄れて寄物を還し賜

ひし時、娘子の怨恨める歌一首 (三八〇九)

二五

ある時、娘子、夫に相別れて後、夫の正

身來らず、ただ裏物を賜へるに、娘子の

還し酬ゆる歌一首 (三八一〇)

二六

夫の君に戀ふる歌一首 短歌并
せたり (三八一一)

二七

ある時、娘子、夫の君に戀ひ、痾瘦に沈

み臥してその夫を喚び、逝歿りし時、口

號める歌一首 (三八一二)

二八

贈れる歌一首 (三八一三)

二九

娘子の、夫の君に棄てらえて、改めて他

- 氏に適きしに、壯士改め適きしことを知らざりしかば、改め適きし縁を顯す歌一首 (三八一五) 一六三
- 穗積の親王の、宴飲の日、酒酣なる御歌一首 (三八一六) 一六三
- 河村の王の、宴に居て琴を弾きてまづ誦める歌二首 (三八一七一) 一六三
- 小鯛の王の、宴に居て琴を取りてまづ詠むる歌二首 (三八一九二〇) 一六四
- 兒部の女王の嗤へる歌一首 (三八二二) 一六四
- 椎野連長年の歌一首 (三八三三) 一六四
- また和ふる歌一首 (三八三三) 一六五
- 長忌寸意吉麻呂の歌八首 (三八四一三二) 一六五
- 忌部首の、數種の物を詠める歌一首 (三八三三) 一六六
- 境部の王の、數種の物を詠める歌一首 (三八三三) 一六六
- 作主のいまだ詳ならざる歌一首 (三八三四) 一六六
- 新田部の親王に獻れる歌一首 (三八三五) 一六六
- 行文大夫の、倭人を誘ふ歌一首 (三八三六) 一六七
- 府官酒食を設けて、右兵衛^{名失せたり}を誘ひて、荷葉に關けて歌を作らしめしに、登時聲に應へて歌へる一首 (三八三七) 一六七
- 心の著く所無き歌二首 (三八三八一三九) 一六七
- 池田朝臣の、大神朝臣奥守を嗤へる歌一首 (三八四〇) 一六八
- 大神朝臣奥守の、報へ嗤へる歌一首 (三八四二) 一六八
- 平群朝臣の嗤へる歌一首 (三八四二) 一六八
- 穗積朝臣の和ふる歌一首 (三八四三) 一六八
- 土師宿禰水通の、巨勢朝臣豐人等の黑色を嗤ひける歌一首 (三八四四) 一六八
- 巨勢豐人の、これを聞きて酬い嗤へる歌一首 (三八四五) 一六八
- 戲に僧を嗤へる歌一首 (三八四六) 一六九
- 法師の報ふる歌一首 (三八四七) 一六九
- 忌部黑麻呂の、夢の裏に作れる歌一首 (三八四八) 一六九

河原寺の倭琴の面の無常の歌二首 (三八四九一五〇)	一六九
また無常の歌二首 (三八五一五三)	一六九
大伴宿禰家持の、吉田連石麻呂の瘦せたるを嗤咲へる歌二首 (三八五三五四)	一七〇
高宮の王の、數種の物を詠める歌二首 (三八五五五六)	一七〇
夫の君に戀ふる歌一首 (三八五七)	一七〇
また戀の歌二首 (三八五八五九)	一七二
筑前の國の志賀の白水郎の歌十首 (三八六〇一六九)	一七二
無名の歌六首 (三八七〇七五)	一七三
豊前の國の白水郎の歌一首 (三八七六)	一七三
豊後の國の白水郎の歌一首 (三八七七)	一七三
能登の國の歌三首 (三八七八八〇)	一七四
越中の國の歌四首 (三八八一八四)	一七四
乞食者の詠歌二首 (三八八五八六)	一七五
怕しき物の歌三首 (三八八七一八九)	一七六

卷の第十七

天平二年庚午の冬十一月、大宰の帥大伴の卿の大納言に任せらえ京に上りし時、倅從の人等、別に海路を取りて京に入る。ここに羈旅を悲み傷み、各所心を陳べて作れる歌十首 (三八九〇九九)	一七七
同じ十年七月七日、大伴宿禰家持の、獨天漢を仰ぎていささか懷を述ぶる歌一首 (三八九〇)	一七九
同じ十二年十一月九日、大伴宿禰家持の、大宰の時の梅花に追ひて和ふる新しき歌六首 (三八九〇一〇六)	一七九
同じ十三年二月、右馬頭境部宿禰老麻呂の、三香の原の新しき都を讃むる歌一首 (三八九〇七一〇八)	一七九
短歌并 せたり (三八九〇七一〇八)	一七九
四月二日、大伴宿禰家持の、霍公鳥を詠みて兄家持に贈れる歌二首 (三八九〇九一〇)	一七九
三日、内舍人大伴宿禰家持の、久邇の京	

- より弟書持に報へ送る歌三首 (三九二一—三) …… 一七九
- 田口朝臣馬長の、霍公鳥を思ふ歌一首 (三九一四) …… 一八〇
- 山邊宿禰明人の、春鶯を詠める歌一首 (三九一五) …… 一八〇
- 同じ十六年四月五日、大伴宿禰家持の、平城の故郷にて作れる歌六首 (三九二一—二六) …… 一八〇
- 同じ十八年正月の日、雪の零りしに、左大臣橘の卿の、王卿等を率て、太上皇の御在所に参入りて作れる歌五首 十六首は略す (三九二七—三二六) …… 一八二
- 同じ七月、越中の守大伴宿禰の、任に赴きし時、大伴坂上の郎女の家持に贈れる歌二首 (三九二七—二八) …… 一八三
- 更に越中の國に贈れる歌二首 (三九二九—三〇) …… 一八三
- 平群氏の女郎の、越中の守大伴宿禰家持に贈れる歌十二首 (三九三一—四二) …… 一八三
- 八月七日の夜、越中の館の下に宴飲せし時、守大伴宿禰家持の歌一首 (三九四三) …… 一八三
- 椽大伴宿禰池主の作れる歌三首 (三九四四—四六) …… 一八四
- 守大伴宿禰家持の歌二首 (三九四七—四八) …… 一八四
- 椽大伴池主の歌一首 (三九四九) …… 一八四
- 守大伴家持の歌一首 (三九五〇) …… 一八四
- 大目秦忌寸八千島の歌一首 (三九五二) …… 一八四
- 大原高安真人の作れる歌一首 (三九五二) …… 一八四
- 守大伴家持の歌二首 (三九五三—五四) …… 一八五
- 史生土師宿禰道良の歌一首 (三九五五) …… 一八五
- 大目秦忌寸八千島の館に宴する歌一首 (三九五六) …… 一八五
- 九月二十五日、大伴家持の、遙に弟の喪を聞きて感傷せる歌一首 短歌并せたり (三九五七—五九) …… 一八五
- 十一月、越中の守大伴家持の、大帳使椽大伴池主が本任に還り到りし時相歡べる歌二首 (三九六〇—六一) …… 一八六
- 同じ十九年二月二十日、大伴家持の、病に臥して悲み傷める歌一首 短歌并せたり (三九六二—六四) …… 一八七
- 大伴家持の、椽大伴池主に贈れる悲の歌

二首 短歌并
せたり (三九六五—六六) 一八

同じ二十年二月二十九日、守大伴宿禰家
持の歌二首 一八

沽洗二日、椽大伴池主の歌二首 (三九六七一
六八) 一八

三月三日、大伴家持の、椽大伴池主に送
れる七言の詩一首 短歌并
せたり (三九六九—七〇) 一八

四日、大伴池主の、守家持の詩に和へ奉
れる歌一首 短歌并
せたり (三九七三—七五) 一九

五日、椽大伴宿禰池主の、守家持に答ふ
る詩一首 序并
せたり 一九

同じ五日、大伴家持の短歌二首 (三九七一
七七) 一九

二十日、大伴家持の、戀の情を起せる歌
一首 短歌并
せたり (三九七八—八二) 一九

四月、大伴家持の、いまだ霍公鳥を聞か
ざる歌二首 短歌并
せたり (三九八三—八四) 一九

三月三十日、大伴家持の二上山の賦一首
短歌并
せたり (三九八五—八六) 一九

三十日、大伴家持の、興に依りて作れる
歌一首 (三九八七) 一九

四月十六日、大伴家持の、霍公鳥を聞き
て懷を述ぶる歌一首 (三九八八) 一九

大目秦忌寸の、守大伴家持を餞する歌二
首 (三九八九—九〇) 一九

二十日、守大伴家持の、布施の水海に遊
覽せる賦一首 短歌并
せたり (三九九一—九二) 一九

二十六日、椽大伴池主の、布施の水海に
遊覽せる賦に敬みて和ふる一首 一編并
せたり (三九
九三—九四) 一九

二十六日、椽大伴池主の、守大伴家持を
餞せし時家持の作れる歌 (三九九五) 一九

介内藏忌寸繩麻呂の、守家持を餞する歌
一首 (三九九六) 一九

守大伴家持の、繩麻呂に和ふる歌一首
(三九九七) 一九

大伴池主の傳へ誦める、石川朝臣水通の
橋の歌一首 (三九九八) 一九

同じ日、守大伴家持の館に飲宴する歌一首 (三九九九)	一九六
二十七日、大伴家持の立山の賦一首 (四〇〇〇一二)	一九六
二十八日、大伴池主の、守大伴家持の立山の賦に敬みて和ふる一首 二絶并 せたり (四〇〇三一〇五)	一九九
三十日、守大伴家持の、椽大伴池主に贈れる歌一首 一絶并 せたり (四〇〇六〇七)	二〇〇
五月五日、椽大伴池主の、守家持の懷を述ぶる歌に報へ和ふる一首 二絶并 せたり (四〇〇八一〇)	二〇二
九月二十六日、守大伴家持の、放逸せる鷹を思ひて、夢みて感悦せる一首 短歌并 せたり (四〇二一一五)	二〇二
高市連黒人の歌一首 (四〇一六)	二〇三
大伴宿禰家持の歌四首 (四〇二七二〇)	二〇三
守大伴家持の、春の出舉に諸郡を巡行し、當時屬する所の歌九首 (四〇二二二九)	二〇四
大伴家持の、鶯の晩く啼くを怨むる歌一	

卷の第十八

首 (四〇三〇)	二〇五
酒を造る歌一首 (四〇三一)	二〇五
天平二十年春三月二十三日、左大臣橘の卿の使田邊史福麻呂を、越中の守大伴宿禰の館に饗せし時、新しく作り并せて古き詠を誦みて各心緒を述ぶる歌四首 (四〇三二一三五)	二〇六
時に明日を期りて布勢の水海に遊覽せむとし、よりて懷を述べて各作れる歌八首 (四〇三六四三)	二〇七
二十五日、大伴宿禰家持の、布勢の水海に往く道中に、馬の上にて口號せる二首 (四〇四四四五)	二〇七
水海に至りて遊覽せし時、各懷を述べて作れる歌六首 (四〇四六五一)	二〇八
椽久米朝臣廣繩の館の宴に、田邊史福麻呂を饗せる歌四首 (四〇五二一五五)	二〇八

太上皇の難波の宮に御在しし時の歌七首	二〇九	大伴家持の重ねて作れる歌二首 (四〇七一)	二二一
左大臣橘宿禰の歌一首 (四〇五六)	二〇九	三月十五日、越前の國の椽大伴池主の來贈れる歌三首 (四〇七三—七五)	二二三
御製の、和へ給へる歌一首 (四〇五七)	二〇九	十六日、越中の守大伴家持の報へ贈れる歌四首 (四〇七六—七九)	二二三
御製の歌一首 (四〇五八)	二〇九	姑大伴氏坂上の郎女の、越中の守大伴家持に來贈れる歌二首 (四〇八〇—八二)	二二三
河内の女王の奏せる歌一首 (四〇五九)	二一〇	大伴家持の報ふる歌一首 (四〇八二—八三)	二二三
栗田の女王の奏せる歌一首 (四〇六〇)	二一〇	また別に所心の歌一首 (四〇八四)	二二四
御船の綱手を以ちて江を汜りて遊宴し給ひし時、史福麻呂の傳へ誦める歌二首 (四〇六一—六二)	二一〇	天平感寶元年五月五日、東大寺の占墾地の使僧平榮を饗せし時、守大伴家持の酒を送る歌一首 (四〇八五)	二二四
後に橘に追ひて和ふる大伴家持の歌二首 (四〇六三—六四)	二一〇	同じ九日、諸僚、少目秦伊美吉石竹の館に會ひて飲宴せし時、百合の花綬を造り、捧げて賓客に贈り、各この綬を賦する歌三首 (四〇八六—八八)	二二四
山上臣の、射水の郡の驛館の屋の柱に題し著けたる歌一首 (四〇六五)	二一〇	十日、大伴家持の、獨幄の裏に居て、遙に霍公鳥の喧くを聞きて作れる歌一首	
四月一日、椽久米朝臣廣繩の館にて宴せる歌四首 (四〇六六—六九)	二一一		
先の國師、館より京に入らむとし、飲饌を設けて饗宴せし時、主人大伴家持の、庭中の牛麥の花を詠める歌一首 (四〇七〇)	二一二		